明治宮殿の設計内容に見る御学問所の用途と意匠的特徴

THE USES AND THE CHARACTERISTICS IN THE DESIGN MEANINGS OF THE MEIJI PALACE'S OGAKUMON-JO

山崎 鯛介*
Taisuke YAMAZAKI

This paper shows that the Ogakumon-jo (literally the Emperor's studying room) in the *Meiji Palace* was designed in relation to the Emperor's works (mainly the affairs of state, studying, dinning with his cabinet, etc). In the history of this project, the Ogakumon-jo was generally designed as two-storied building because it was needed to separate the space for each exclusive use of his works, and it was also needed to combine them as one building for the formality following the *Kyoto Palace's* building arrangement. These exclusive uses were also expressed on their interiors.

Keywords : *the Meiji Palace, Ogakumon-jo, the Kyoto Palace, the Akasaka Temporary Palace, tradition, Modern Japanese-style*

明治宮殿、御学問所、京都御所、赤坂仮皇居、伝統、近代和風

1. 緒言

明治21年に竣工した明治宮殿（正式には「皇居宮殿」）の意匠的特徴について、筆者はこれまで4本の論文において、竣工建物に見られる具体的な特徴とそれらの形成過程について論じてきた。そのうち先行する3論文では、壮麗かつ洋折衷の内部空間で知られる表宮殿の建物について、その意匠の特徴がどのような設計意図に基づくものであるかを、主に建物の「用途」との関係に注目しながら考察した。すなわち、「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」¹⁾では、明治16年7月以降の実施過程における設計経緯を詳細に明らかにし、表宮殿の特徴である大空間・和洋折衷の室内意匠が地鎮祭後に行われた2度の設計変更によって決められたこと、壁面や家具に用いられた洋風意匠が洋風の宮中夜会を想定して導入されたと考えられること、そこには宮内卿・伊藤博文の意向が反映している可能性が高いことなどを明らかにした。続く「明治宮殿の設計内容に見る儀礼空間の意匠的特徴」²⁾では、竣工建物の室内意匠を表宮殿全体の平面計画とあわせて考察し、表宮殿の平面計画が近代的な宮中儀礼に配慮して計画されたこと、謁見所や饗宴空間の室内意匠がそこで行われる宮中儀礼の内容と関係づけてデザインされていたことなどを明らかにした。そして「明治宮殿の造営過程に見る木造和風の表向き建物の系譜とその意匠的特徴」³⁾では、造営過程において木造和風で計画された表向き建物

の系譜を明らかにし、そのうち明治14年の木造和風宮殿計画では「紫宸殿」風の謁見所が計画され、明治15年の吹上宮殿計画では「小御所」風の内謁見所が計画されるなど、伝統的な宮中儀式が行われる建物の意匠には、「宮殿」としての格式を示すために京都御所風の意匠が繰り返し用いられてきたことを明らかにした⁴⁾。

本研究では、これら先行論文では詳細に論じてこなかった「御学問所」を取り上げ、建物の用途に注目しつつ、竣工建物の意匠的特徴と設計経緯を明らかにする。建物の用途に注目する理由は、設計過程を見る限り「御学問所」と称する建物には「学問」以外にも多様な用途が想定されていたと考えられるからであり、例えば計画案には建物の呼称を「御学問所」としながら2階に「会食所」を設けた例も見られ、また部屋名を「御学問所」としながらも、明らかに天皇の日常の御座所を意図したと考えられる例も見られる。明治以降の天皇に見られる多様な日常的活動は、江戸時代以前には見られない「近代の天皇」に特有の役割であり、そうした多様な活動を支える施設をどのように設けるかも「近代の宮殿」として重要な課題であったと考えられる。よって本研究では、考察の対象とする用途を「学問」に限定せず、日常政務やその他の天皇の日常的な活動内容を広く含むこととする。

竣工建物の意匠的特徴としては、表宮殿の主要建物で唯一、木造二階建てで建設されたことが知られている。本研究では、なぜ御学問所

* 東京工業大学大学院理工学研究科 助手・工修

Research Assoc., Dept. of Architecture, Graduate School of Science and Engineering, Tokyo Institute of Technology, M. Eng.

のみが木造二階建てで建設されたかについて、その理由を設計過程も含め、先述した用途の多様性との関係から論じることを試みる。

既往研究では、明治宮殿の御学問所について、設計経緯も含めて用途や意匠の特徴を詳細に検討したものは見られない。

ところで、「御学問所」の呼称を持つ建物は、江戸時代以前の禁裏や公家の邸宅内にも建設されていたことが知られている。近世の御学問所に関する研究には、藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』（中央公論美術出版、1987年）や平井聖「禁裏における学問所について」（『日本建築学会論文報告集』第60号、pp.601-604、1958年10月）があり、中世から近世初頭にかけては、藤田勝也の2論文「中世天皇御所における御学問所の成立と展開」（『日本建築学会計画系論文集』第560号、pp.269-276、2002年10月）と「中近世天皇御所における御学問所の変容と展開」（同前、第580号、pp.221-227、2004年6月）がある。ここでは「御学問所」の用途について、江戸時代以前には「学問」以外に対面の場としても使われていたこと⁵⁾、またそうした学問や対面においても儀礼的な性質は少なく、天皇の私的空間としての性質が強く見られること⁶⁾などが指摘されている。このような「御学問所」の性質が、明治宮殿の御学問所にどのような形で継承されているかは興味深いテーマであり、本研究でもそうした点を念頭に置いて、計画案の用途や意匠の特徴を京都御所の御学問所と適宜比較した。

なお、明治宮殿の御学問所について論じる前に、第2章では赤坂仮皇居における天皇の日常的な活動と、そこで用いられた建物の特徴について論じる。赤坂仮皇居が使用された明治初期には「近代の天皇」としての役割はまだ明確ではなく、仮皇居における天皇の行動形式も多分に過渡的な状態であったと考えられる。よって明治12年以降の皇居造営計画については、同時期の赤坂仮皇居におけるこうした過渡的な状態を前提に比較・考察することが必要と考えられる。

史料には、赤坂仮皇居については『明治天皇紀』⁷⁾と宮内庁所蔵『工事録』（内匠寮）を主に用い、明治宮殿については『皇居造営録』（皇居御造営事務局、明治9年～23年）と『皇居御造営誌』、『皇居御造営内部諸裝飾明細図』（いずれも内匠寮、明治25年）、そして東京都立中央図書館木子文庫所収の明治宮殿関係史料をあわせて検討した。なお、建物の呼称は宮内省から明治21年12月27日に布達が出され、計画案で「御学問所」とされていた部屋は「表御座所」へと改称されたが、本研究では設計経緯を扱う関係上、造営中の呼称を用いる。

図1(左) 赤坂仮皇居新築御学問所平面図（宮内庁所蔵、明治13年頃、部分※上方が南）

図2(右) 赤坂仮皇居新築御学問所断面図（『工事録』所収、明治15年4月）

2. 赤坂仮皇居における天皇の日常的な活動とそのための施設

西ノ丸皇居が明治6年5月に焼失したのに伴い、赤坂離宮には「仮皇居」が設置され、その施設として旧紀州徳川家中屋敷の建物が転用された。そこでは近代的な「仮皇居」としての体裁を整えるため、既存建物の改修や増築が行われたと考えられるが、本章では、このうち御座所や御学問所など天皇の日常的な活動に用いられた建物について工事の内容を『工事録』から明らかにし、『明治天皇紀』からわかる活動内容と併せて検討することで、仮皇居における天皇の行動形式と建物の空間特性がどのように関係づけられていたかについて論じる。

赤坂仮皇居に新築された建物としては、明治7年12月頃に「素朴なる木造西洋式建築」⁸⁾として建設された洋風の御学問所がある。宮内庁所蔵「赤坂仮皇居御座敷向之図」（図1）⁹⁾から、建物は平面がおおよそ30帖（5間×3間）¹⁰⁾の1室空間で、内部仕上は「西洋形塗天井廻り総張付」であったことが知られる。また『工事録』所収の断面図（図2）¹¹⁾から、天井高は約15尺と高かったことがわかる。「西洋式」の要素としては、断面図に描かれた天井のモールディングや高さ約7.5寸の巾木のほか、室内に据えられた暖炉や床仕上げの絨毯敷きが挙げられる¹²⁾。また建物の外観は「窓廻り下見其他ペンキ塗」¹³⁾であったと『工事録』に記されている。

新築の理由について『明治天皇紀』には、以下のように移転当初には「御学問所代」と称する場所で日常政務と「御講学」の両方が行われていたものの、それが御講学に不都合であったため、新たに御講学専用の建物として、この「御学問所」を建設したと記されている。

「赤坂仮皇居は其の規模狭小にして、特に御講学のために用ゐるたまふべき宮室なし、習字のみは梅間（襖・壁張等に墨梅を画ける階下の一小室なり）を用ゐたまへども、其の他は御学問所代に於て学習したまふを常とす、御学問所代は階下の二室にして、各室二十帖を敷くべし、然れども日常政務を執らせたまふ所なるを以て、御講学に使はず、是を以て曩に御学問所代西南方の地をトシて新に御学問所の建設に著手し、既にして成る」（明治7年12月22日条）

また、室内には天皇の御講学の相手をする宮内省九等出仕4人分の机も置かれていたことが、以下の記述からわかる。

「其の中央西寄りに東面して玉座を設け、傾斜面の西洋式机を置く、玉座の左右に各々二脚の机を並べて御相手奉仕の宮内省九等出仕藤波言忠・同大原重朝・同堤亀麿・同荻昌吉等の席と為す、講師の座位は東寄り梢々北方に玉座に面して之を設け、平面の机一脚を置く」（明治7年12月22日条）

以上のことから、御学問所が1室大空間の建物として新築された理由は、建物の用途である御講学が、天皇と数人の宮内省九等出仕が一緒に行う形式で行われ、それを可能にする建物が必要とされたためと考えられる。そして、建物を洋風意匠とした理由には、御講学の科目にドイツ語をはじめ、西洋的な科目が多く選択されていたことが関係していると考えられる¹⁴⁾。

改修された場所では、御座所の2階が注目される。天皇の御座所は、後に日光田母沢御用邸に移築された3階建ての建物の1階部分に置かれていた¹⁵⁾が、この2階部分について、明治8年5月～12月頃に作成されたと考えられる宮内庁所蔵「赤坂仮皇居切絵図敷物間地」¹⁶⁾（以下『敷物間地』、図3）を見ると、江戸末期には2室であった座敷¹⁷⁾が1室として描かれている。この部屋の改修記録を『工事録』に探すと、「表二階欄間取解天井張替其他營繕」（明治7年2月5日）がそれに相当すると考えられ、文面から見る限り、部屋境の欄間を撤去し、天井をフラットな紙貼天井に改修したものと見られる¹⁸⁾。『工事録』には、他にも「御学問所二階硝子障子建入其他營繕」（明治9年11月26日）や「表御二階用絨毯買上」（明治11年12月18日）といった記録

があることから、改修後の御座所2階は、フラットな紙貼天井とガラス障子を備え、床に絨毯を敷いた1室空間であったと考えられる。

この1室空間に改修された御座所2階の用途については、『明治天皇紀』の「御座所楼上に於て御談会あり」¹⁹⁾や「太政大臣三條実美・左大臣島津久光・右大臣若倉具視・宮内卿徳大寺実則・宮内大輔萬里小路博房・侍従長東久世通礼を召し、御学問所代楼上に於て午餐に陪せしめたまふ」²⁰⁾といった記述から、主に「御談会」や大臣・宮中関係者との御昼餐などに使用されたと考えられる。この「御談会」は、以下の記述から明治7年2月の改修後すぐに始められたと考えられ、また御昼餐に関する『明治天皇紀』の記事も、初出はほぼ同時期の明治7年4月30日となっている。

「御談会は君臣談論を交ふるの御會なり(中略)其の始めて開催せられたるは、蓋し六年の終より七年の初に在り、(中略)而して侍坐する者、時に大臣・参議等の参候することありと雖も、大抵宮内卿・侍従長・侍読の臣及び従四位齋藤利行・宮内省御用掛島山義成等五六人なり」(明治7年5月17日条)

以上のことから、移転後まもない明治7年2月に御座所の2階を1室空間へと改修した目的は、天皇と臣下との親睦を深める場を設けるためであったと考えられる。御座所の2階が選ばれた理由としては、それが公式の宮中儀礼が行われる1階の「小御所代」や「旧御学問所」、また政務を執る「御座所」などと空間的に離れている上、眺望も良くやや内向きのくつろげる空間であったためと考えられる。

ところで、こうした御講学や宮中関係者との御昼餐は、明治13年以降に天皇の政務が多忙になってくると、次第に行われなくなって行ったと考えられる。すなわち、天皇の内閣への臨御は明治10年9月2日に正式決定され、明治13年3月18日には日曜・祭日を除く毎日の朝10時から内閣に臨御するように定められたが²¹⁾、『明治天皇紀』を見ると、この明治13年を境に御講学と御談会の回数が急速に減少している²²⁾。使い方の変化は、御座所2階にも見ることができ、当初は大臣や宮中関係者を対象とした御談会や御昼餐が行われていたのに対し、明治10年10月以降になると、内閣との関係をより重視した「御陪食」が行われるようになる。『明治天皇紀』の記述を以下に示す。

「是れより先侍補相談して曰く、大臣・参議が議政上の拝謁は日々内閣に於て行はるべし、然れども水魚の親しみ未だ深からず、君臣上下の親和を図らんこと御陪食の制を設けらるゝに若くは無しと、乃ち数々太政大臣・右大臣に懇懇する所あり、閣議遂に之れに同意し、閣臣一人・當番侍補二人に時々御陪食仰付けらるゝことと定む、然るに侍補は、閣臣一人には其の効力なしとて抗拒する所あり、仍りて更に大臣・参議各一人、當番侍補二人と定め、以て敬慮を候す、天皇之れを裁可し、是の日其の第一回を行ひたまへるなり、爾後、毎週金曜日を以て其の日と定めらる」(明治10年10月27日条)

図3. 赤坂仮皇居御座所2階平面図(宮内庁所蔵『敷物間地』より、部分)
明治8年5月～12月頃、上方が南

この「御陪食」は、内閣臨御の日が改定された明治13年3月以降に「三月以降陪食者の範囲を拡張して、諸省卿輔、議官以上の元老院官吏及び陸海軍武官をも召したまふ、又臨期に規定外の勅任官及び海外派出公使等を召さるゝこととす」²³⁾と、陪食者が大幅に増員されていることから、天皇と内閣の関係を強化する制度としてこの時期に新たに導入されたものの一つであったと考えられる²⁴⁾。

以上のように、この時期の天皇の日常的な活動としては、御座所での日常政務以外にも、御講学や御談会・御陪食などがあった。移転後の赤坂仮皇居で行われた改修・増築工事は、これら天皇の多様化した活動内容のそれぞれに対し、個別の場を与えることを目的に行われたものであったと考えられ、具体的には明治7年に洋風の御学問所が御講学専用の施設として新築され、1室空間に改修された御座所の2階では「君臣親和」のための御談会や御陪食が行われた。なお、御学問所が洋風意匠で新築された理由は、御講学の内容が西洋的なものを重視していたことに因んだためと考えられ、これは御学問所の意匠を用意と関係づけて決めた初期の事例として見る事ができる。

3. 吹上宮殿における2階「会食所」の設置と御所風の外觀意匠

竣工した明治宮殿の御学問所が表宮殿の他の建物と比べて大きく異なる特徴の一つに、木造2階建てである点が挙げられる。なぜ2階建てであるかについては、それが山里と西ノ丸の境界という高低差のある場所に建てられたためとも考えられるが、宮内庁所蔵『皇居御造営誌編纂下調図』(以下『下調図』)所収の計画案を見ると、2階建ての計画案は平地に計画された吹上宮殿において既に登場しており、よって2階建てはそうした敷地形状の特性からではなく、建物に想定された用途との関係から選択された可能性の方が高いと見られる。吹上宮殿の御学問所が2階建てで計画されるようになったのは、『下調図』において初めて階段が描かれた明治14年9月12日案(第32号)からと考えられ、その後は「吹上最終案」(明治15年12月27日案:第66号)まで、一貫して2階建てで計画されている。よって吹上宮殿では、事業組織である「皇居造営事務局」が設置された明治15年5月27日以降のすべての計画案が2階建てで計画されたと見てよい。このうち明治15年10月4日案(第57号)については、木子文庫に同時期のものと考えられる1・2階の平面図²⁵⁾や矩計図²⁶⁾、立面図(妻側・平側)²⁷⁾、屋根伏図²⁸⁾が収められており、計画案の詳細について知ることができる。そこで本章では、まずこの10月案の設計内容について詳細に明らかにし、それを前章で明らかにした当時の天皇の行動形式と併せて考察することで、吹上宮殿の御学問所にはどのような用途が想定され、またなぜ2階建てで計画されたかについて論じる。

まず、1階の平面(図4上)について見ると、部屋を6間取りとして四周に入側を設け、一之間である「御学問所」(12.5帖)の床・欄を庭と反対側の壁面に設けた点は、京都御所の御学問所と同じ形式といえる。これと似た形式の空間を赤坂仮皇居に探すと、床・欄を備えた主室と次の間・入側からなる平面形式という点では「御座所」の平面が共通している。また矩計図を見ると、1階部分の床仕上げは入側部分が厚板張りであるのに対し、「御学問所」室内は畳敷きのように描かれている²⁹⁾。床仕上げについては、赤坂仮皇居の御座所もまた聖徳記念絵画館壁画「侍講進講」や「兌換制度御治定」において、床仕上げが畳の上に絨毯を敷いたように描かれており³⁰⁾、両者の床仕上げは同じ形式で計画されていたことも考えられる。

また、この他に1階平面で両者が共通している点としては、建物に隣接して「呉服之間」が設けられた点が挙げられる。吹上宮殿の計画案では「下調図」を見る限り、明治15年6月案³¹⁾以降のすべての案において「呉服之間」が計画されたと見られるが、赤坂仮皇居でもこの「呉服之間」は御座所に隣接して設けられている。この部屋の用途を示した記録はないが、同様の部屋が京都御所には見られないこと、計画案では常に御座所よりも広い面積で計画されたことなどから見て、宮中儀式の際の衣装直しの場³²⁾として計画されたことが考えられる。このように、吹上宮殿の1階には赤坂仮皇居の御座所と共通の形式が多く見られることから、「御学問所」と記された床・棚付きの部屋は、天皇の日常的な御座所として計画された可能性が高い。

2階には、平面図(図4下)に見られるように、大面積の「会食所」(4間×7間=56帖)が計画された。部屋の用途である「会食」については、規模が56帖と三大節賜宴³³⁾を行うには狭く、また2階の1室空間という点が赤坂仮皇居の御座所2階と共通していることから、御陪食などが想定されたと考えられる。矩計図を見ると、会食所の床は入側・室内ともに厚板張りで設計され、また内法高も2階は6.6尺と、1階の6.54尺(敷居天端～無目下端)よりも若干高く設定されるなど、立式を前提にした工夫は1階「御学問所」よりも明確に見られる。一方で、建物の呼称が「御学問所」であるにも関わらず、平面計画では「御講学」のための空間が確保されていない。宮殿全体で見ても、他

図4. 吹上宮殿計画・御学問所平面図
(上:1階平面図、下:2階平面図)

(木子文庫所蔵・部分、明治15年10月頃) いずれも上方が北

図5. 吹上宮殿計画・御学問所南立面図(宮内庁所蔵、日付なし)

に御講学専用の建物が計画された様子は見られないが、これは前章で述べたように、明治13年以降、天皇の御講学があまり行われなくなったことが影響していると考えられる。

建物の意匠に関しては、赤坂仮皇居との共通点はあまり見られず、むしろ2階建てであることを除けば、京都御所の御学問所との共通点が比較的多く見られる。具体的には、1階「御学問所」と2階「会食所」の天井意匠に素木の(二重)折上小組格天井が用いられたほか、入側建具に舞良戸と障子、外周建具に「タテ蓆戸」と明障子を用いた点、さらに立面図(図5)から、椽に勾欄を設け、外周部の小壁に鉤形付きの木格子欄間³⁴⁾を設けた点が御所の御学問所との共通点として指摘できる。また、屋根伏図に「銅葺」と記された屋根や庇は、立面図を見る限り平葺きで計画されたと考えられ、御所の檜皮葺きを意識した可能性も考えられる。立面のプロポーションも、1階部分については御所とほぼ同じと見てよく、計画案では建物の幅(平側)が11間と京都御所の9.5間よりやや大きいが、内法高(無目下端)も京都御所の6.1尺³⁵⁾よりもやや高い6.5尺で計画され、全体のバランスは維持されたと見て良い。なお、計画案には同時期の聖上常御殿³⁶⁾に既に導入されていたガラス障子や暖炉が見られないが、これも立面に煙突やガラス障子が現れることを避けたためと見ることもできる。

以上のように、吹上宮殿の御学問所では1階が御座所、2階が御陪食の場として計画されたと考えられる。これを前章で見た赤坂仮皇居と比較すると、両者の共通点としては、天皇の多様な活動内容のそれぞれに個別の場を設けた点が挙げられ³⁷⁾、両者の違いとしては、赤坂仮皇居ではそれを個別の建物を複数建設することで対応したのに対し、吹上宮殿では2階建ての建物1棟に纏めることで対応した点が挙げられる。吹上宮殿の御学問所が2階建てで建設された理由は、異なる用途ごとに部屋を設けつつも、「宮殿」を構成する建物としては京都御所と同様に「御学問所」と称する建物1棟に纏めることが必要と判断されたためと考えられ、そうした御所に倣う姿勢は、建物の意匠に御所風が多く適用された点にも窺える。拙稿³⁸⁾で論じたように、吹上宮殿では隣接する内謁見所においても室内に99帖の大空間を確保しつつ、「宮殿」としての格の高さを示すために京都御所の「小御所」とよく似た意匠が適用されたが、こうした御所風の意匠を適用する姿勢は、吹上宮殿の基本的な設計態度であったと考えられる。

4. 実施過程における1階「広間」の拡大と2階「御学問所」の設置

山里正殿・吹上宮殿計画はその後中止され、明治16年7月には再び敷地を西ノ丸と山里に移して「木製假皇居」計画(以下「実施過程」)が策定された。拙稿「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」(先掲)で論じたように、その後の設計過程では主に儀礼空間を対象に、室内を壮麗化するための設計変更が加えられ、明治17年4月の地鎮祭後には着工延期の期間に主要建物の天井高が拡大され、躯体工事が一段落した明治20年には室内意匠が大幅に洋風化された。御学問所と内謁見所は、ともにこうした壮麗化の対象から外れていたが、史料の日付から、御学問所もほぼ同時期に設計変更が加えられていたことが知られる。まず本章では、木工事着手までの設計過程について詳細に検討し、主として平面計画の分析から、建物に想定された用途がどのようなものであったかについて考察する。そして、その内容を前章で見た吹上宮殿の計画案と比較することで、両者の間にどのような違いが見られるのかについても明らかにする。

まず、木子文庫所収の明治16年10月頃の平面図(図6)³⁹⁾を見ると、実施過程の当初、御学問所は平屋建てで計画され、同時に内謁見所の東側に2階建ての「休憩之間」が計画されたことが知られる。この「休憩之間」は、吹上宮殿では御学問所2階に設けられていた「会食所」を独立させたものと見ることができ、建物を独立させた意図としては、御学問所や内謁見所だけでなく、「休憩之間」を新たに木造で計画された会食所とも関係づけようとしたためと考えられる。それは、この建物の呼称がその後の設計過程で「休憩之間」からやがて「後席之間」に変更⁴⁰⁾され、竣工後は後席之間の小食所(竹之間)において主に御陪食が行われた⁴¹⁾ことから推察される。

一方、平屋建てで計画された御学問所については、平面が6間取りで四周に入側を廻し、外周建具に「タテシミ戸」を用いた点が吹上宮殿の1階平面と共通している。その他の吹上宮殿との共通点としては、同時期と考えられる矩計図⁴²⁾において、室内の床仕上げが「畳」で計画されたことや、同様に平屋建てで計画された明治17年1月頃の計画案の起こし絵図(図7)⁴³⁾において、外周欄間に鍬形付きの木格子欄間が用いられた点などが挙げられる。よって平屋建ての計画案には、吹上宮殿の1階部分の形式がほぼ踏襲されたと見て良い。

御学問所は、表宮殿の床面積が倍増された後の明治17年2月になって、再び2階建てに変更された⁴⁴⁾。その後も計画は2階建てのまま設計が進められ、明治18年8月には木工事仕様書である「御学問所築造仕法書」(以下「仕法書」)が作成され、同年10月7日には木工事に着手⁴⁵⁾している。これら実施過程の計画案を見ると、吹上宮殿の計画案と同じ2階建てではあるが、その平面計画は大きく異なっており、両者では建物の用途に対する考え方が異なっていたと考えられる。まず、木子文庫所収史料を用いて1階部分の平面形式を検討すると、明治17年2月14日案⁴⁶⁾以降のすべての計画案で、南列の部屋は一之間と広間からなる2室構成で計画されている。このうち明治17年5月7日案(図8左)⁴⁷⁾と明治18年1月28日案(図9左)⁴⁸⁾をより詳しく比較すると、後者では床飾りの位置が北面から西面へと変

更され、前者では部屋境に設けられていた暖炉が西面の床脇へと移動されたことがわかる。こうした変更は、通常は御座所として使う一之間の規模を変えずに、建具を取り外すことで大面積を必要とする用途にも対応できるようにした工夫と考えられ⁴⁹⁾、床飾りの位置変更はそうした場合を想定したものであったと考えられる。こうした大部屋として使うことを想定した工夫は、高さ方向の寸法が若干拡大された点にも見ることができ、明治17年5月頃に作成されたと見られる矩計図⁵⁰⁾と明治18年9月13日作成の矩計図⁵¹⁾を比較すると、階高は22.05尺から22.59尺へ、内法高(敷居天端～無目下端)は6.8尺から7尺へ、そして天井高(敷居天端～折上格天井の格縁下端)は14.36尺から14.65尺へと、それぞれ高くなっていることがわかる。

2階の平面形式については、明治17年5月7日案(図8右)と明治18年1月28日案(図9右)を比較したところ、いずれにも「御学問所」と記された床・棚を持つ20帖程度の部屋が計画された点が共通点として挙げられる。両者では間取りや部屋の形状が異なるが、これは主に1階の暖炉・煙突位置の変更によるものと考えられる。2階の平面形式には1階のように隣室と一体で使おうとする工夫は特に見られず、高さ方向についても、2階の内法高・天井高にはほとんど変化が見られない。この「御学問所」と記された一之間の用途としては、将来的に必要とされる御講学の場合他に計画されていないことから、文字通り御講学の場合として計画された可能性が高いと考えられる⁵²⁾。

なお、前章で見たように、吹上宮殿の外観意匠には御所風の意匠が用いられたが、実施過程の計画案にはそうした傾向が見られない。すなわち、明治17年5月7日案以降の計画案では、外周建具にガラス障子が用いられるようになり、また明治18年8月作成の「仕法書」では、2階の外周建具について「同所(筆者註:2階) 外側雨戸建戸袋付」と、表宮殿の主要建物では唯一、雨戸形式が導入されたことが記されている。この雨戸形式とガラス障子の導入により、建物の外観は御所風の吹上宮殿と決定的に異なるものになったと考えられる。

図6. 明治16年10月頃の御学問所ほか平面図(木子文庫所収・部分)

図8. 御学問所1・2階平面図(明治17年5月7日、木子文庫所収・部分)

図7. 明治17年1月頃の御学問所の起こし絵図(木子文庫所収・部分)

図9. 御学問所1・2階平面図(明治18年1月28日、木子文庫所収・部分)

5. 竣工建物の室内意匠に見られる特徴とその意図

竣工した御学問所の室内意匠については、『皇居御造営誌』所収の仕様書や『皇居御造営内部諸装飾明細図』から知ることができる。この竣工時の室内意匠と木工事着手（明治18年10月）⁵³⁾ 前後の室内意匠とを比較すると、当初は伝統的な和風意匠で計画されていたものが、設計変更によって他の建物には見られない特異な意匠に変更されたことが知られる。本章では、変更前後の室内意匠の特徴を明らかにするとともに、それを前章で明らかにした部屋の用途、すなわち1階は日常政務の場である御座所、2階は御講学としての御学問所であることと併せて考察し、竣工建物に見られる特異な室内意匠が、部屋の用途とどのように関係づけられたかについて論じる。

変更前の室内意匠については、明治18年4月25日付の平面図⁵⁴⁾ などから、建物全体が伝統的な和風意匠でまとめられていたことが知られる。すなわち、1階の一之間（「御学問所」）は、天井を「二重折上小組格天井」、入側建具を「コシ付きガラスセウジ」、入側小壁を「ツノガラマド」、部屋境を「フスマ」、壁仕上げを「ハリ付」とし、2階も一之間（「御学問所」）の天井を「格天井板違張」としたほか、基本的な仕様については、「階下同断二致」⁵⁵⁾ と記されている。

竣工した御学問所の室内意匠に見られる特異な意匠としては、まず框の入隅部分に丸面を取った中国風意匠のガラス障子（図10）⁵⁶⁾ が挙げられる。木子文庫に収められた建具の計画図から、建具は和風意匠のガラス障子⁵⁷⁾ から枠に雷紋を彫った中国風デザイン（図11）⁵⁸⁾ のものまで、さまざまに検討されたことが知られる。これらとの比較から、実施案は枠の形と材質（桜）⁵⁹⁾・色付け⁶⁰⁾によって中国風を表現したものと見ることができる。同様のデザインは内謁見所の入側建具にも適用されており、これらは「中段」に建設された内謁見所と御

図10（左）. 竣工御学問所2階入側建具（『皇居御造営内部諸装飾明細図』より）
図11（右）. 御学問所建具「絹張障子」計画案（木子文庫所収・部分）

図12. 竣工御学問所南立面図（『皇居御造営誌・御学問所』より）

学問所の共通性を示すために、奥宮殿の伝統的な明障子や儀礼空間の洋風ガラス扉とは異なるデザインを用いたものと考えられる。特に御学問所では、この建具が入側建具以外にも外周建具や入側小壁のガラス欄間（南面のみ）⁶¹⁾、部屋境の「腰付中襖」にも適用されており、加えて外周建具が表宮殿では唯一、雨戸形式とされたために、この建具意匠が外観立面に現れ、建物が2階建てであることも相まって、竣工建物の外観を極めて特徴的なものになっている（図12）。

建具以外では、2階の天井意匠にも他の建物とは異なる特異な意匠が用いられた。木工事着手時点では、一之間・広間ともに「格天井板違張」で計画されていたが、明治20年2月に作成された「階上御学問所及廣間北之間椽座敷共格天井及猿類天井共模様替仕様書」⁶²⁾ では、一之間の天井が格縁を「黒柿」、格間板を「桐」とした「吹寄格天井」（図13左）に変更され、広間の天井も格縁の材料が「桑」と指定された。さらに同史料所収の詳細図（図13右）を見ると、格縁の黒柿や桑はムク材ではなく、厚さ3分〜4分の板を心材に刳ぎ付けたものであることが知られ⁶³⁾、別の史料⁶⁴⁾ では色付けを施すように指示されている。天井にこうした工芸的な素材や技法⁶⁵⁾を用いた例は、表宮殿の他の建物には見られない。御学問所2階のみにこうした比較的自由な意匠が適用された理由は、ここが表宮殿の中で最も内向きであり、格式の表現があまり必要とされなかったためと考えられる。

また、室内装飾に用いられた技法やモチーフに注目すると、1階と2階ではモチーフが部屋の用途に応じて使い分けられたと考えられる。表1は、竣工建物の1階・2階それぞれの一之間に用いられた、天井、壁張付、入側建具、鍔金物、暖炉鏡縁の装飾技法とモチーフをまとめたものであるが、これを見ると、1階には折上小組格天井、金砂子蒔張付、六葉金物といった伝統的な書院造りの意匠が適用されたのに対

図13. 2階「御学問所」の吹寄格天井と格縁の断面（『皇居造営録』所収）

表1. 御学問所の1階・2階一之間に用いられた室内意匠の比較

	1階	2階
天井意匠	折上小組格天井	吹寄格天井
部屋境欄間	仕様 画題 銀杏・黄土塗 「荒磯」	黒柿（格縁）・桐板（格間板） 椀材・木象眼入 「面窓菊」
壁張付	仕様 画題 金砂子蒔 「須磨の寝覚」	「ウコン色」・「モヘギ色」紙貼 「大窓秋」押箔
入側建具	材料 桧模様の 「浮草」	桧造・彫刻 松（外）・梅（内） 蘭（外）・花枝（内）
長押釘隠	仕様 三返鍔金	色絵彫・色絵打金 「瞿麦丸」（内法長押） 「藤カヅミ」（天井長押）
暖炉鏡縁	意匠 六葉	漆塗蒔絵 存星彫色指 「玉椿」

※『皇居御造営誌・御学問所』仕様書をもとに作成

し、2階は吹寄格天井、色紙の張付壁、色絵彫りの鍔金物など、全体的にややくだけた意匠・仕様で全体がまとめられた様子が窺える。

装飾モチーフについては、部屋の用途と関係づけて決められた可能性が高いと見られる。1階の一之間(図14)については、千鳥を描いた「須磨の寝覚」⁶⁶⁾と題する壁張付や腰板・欄間の「浪」・「荒磯」など、和歌に因んだと考えられる画題⁶⁷⁾で室内装飾がまとめられたのに対し、2階の一之間(図15)については、壁張付や欄間の「窠」⁶⁸⁾や「菊」、入側建具の「蘭」や「梅」など、中国風あるいは「四君子(梅・菊・蘭・竹)」に因んだ画題で室内意匠がまとめられたと考えられる。1階の和歌に因んだモチーフは、伝統的な書院造りの意匠と同様に、御座所としての「格式」を表現したものと見ることができ、それに対して2階の中国風の植物文様や「君子」を象徴するモチーフは、

図14. 1階「御学問所」の室内意匠(『皇居御造営内部諸装飾明細図』より)
(上: 部屋境欄間「荒磯」、左: 張付「須磨の寝覚」、右: 入側建具腰板「浪」)

図15. 2階「御学問所」の室内意匠(『皇居御造営内部諸装飾明細図』より)
(上: 部屋境欄間「面窠菊」、左: 張付「大窠秋」、右: 入側建具腰板「蘭」)

表2. 「諸宮殿御絵様抜萃」(明治18年9月頃)記載の張付および杉戸の画題

		1階	2階
建具 張付	一之間	「古今和歌集/意花」 桜花爛漫とさきたるさま 楓林月を帯ふさま 寒林雪を帯ふさま	朱喜読書樂四時詩意 唐詩/意 明人詩意
	広間 北之間	経政竹生鳥二弾枇杷図/芭蕉 道風揮書図/河成伝真図 成道蹴鞠図/義光伝曲図 西行詠歌図/棟花 酒公彈琴図/文時冷泉院詠花園 吉備公詠基図/小督仲國殿上合奏図	詩人暁対海棠図/義人立花陰月図 義人掬月図/義人立花陰図 春郊尋詩図/溪亭畹蘭図 松陰焚香図/閑窓烹茶図 長春花/紫陽花
杉戸画題 (表/裏)			

儒教中心の御講学⁶⁹⁾にふさわしい場としての演出を試みたものと理解できる。そして、同様の装飾モチーフの選び方は、木工事着手前の明治18年9月頃に作成⁷⁰⁾された張付壁や杉戸の画題リスト「諸宮殿絵様抜萃」(表2)においても見ることができる⁷¹⁾。

以上のように、御学問所の室内意匠に用いられた特異な意匠は、いずれも1階では日常の御座所、2階では御講学の場という部屋の用途に因んで決められたものであったと考えられる。本稿の第2章では、赤坂仮皇居の御学問所が洋風重視の御講学内容に因んで洋風意匠で建設されたことを論じたが、本章で見たように、竣工建物においても御講学の内容と室内意匠とを関係づける姿勢は見ることができ、また既往研究では、同様の傾向が近世以前の御学問所と称する建物にも見られることが指摘されている⁷²⁾。よって、赤坂仮皇居も含めた明治期の御学問所は、御講学の内容が室内意匠に表現されたという点で、近世以前の御学問所の系譜を継ぐものと理解することができる。

6. 結論

本稿では、宮内庁や木子文庫所蔵の史料を用いて明治宮殿の「御学問所」の設計経緯を詳細に検討し、明治期以降に多様化した天皇の日常的な活動が、建物の平面計画や用途の設定にどのような形で示されたか、またそうした用途が建物の意匠とどのように関係づけられたかに注目して考察を行い、以下のことを明らかにした。

『工事録』所収の赤坂仮皇居に関する改修・増築記録と『明治天皇紀』に記された天皇の行動を比較したところ、明治7年には天皇が日常政務を執る御座所とは別に、御講学専用の場として洋風の御学問所が新築され、また御談会や御昼餐など「君臣親和」を図る場として、御座所の2階が1室空間に改修された。ここでは天皇の多様な活動のそれぞれに対し、個別の場を設けることが重視されたと考えられる。

明治宮殿の造営過程では、吹上宮殿計画以降、御学問所がほぼ一貫して2階建ての建物として計画された。1階と2階の用途については、1階はいずれも天皇が日常的に政務を執る御座所として計画され、2階の用途については、吹上宮殿の「会食所」は御陪食の場として、実施過程の「御学問所」は御講学の場として計画されたと考えられる。こうした個々の用途に専用の場を設けようとする姿勢は、明治宮殿と赤坂仮皇居に共通であり、近代の宮殿としての特徴と理解できる。

一方、なぜ皇居造営計画では仮皇居のように分棟形式でなく、建物が常に2階建てで計画されたかについては、それぞれの用途に異なる部屋を与えつつも、「宮殿」を構成する建物としては、あくまで京都御所と同様に「御学問所」と称する建物1棟に纏めることが必要と判断されたためと考えられ、そこには京都御所をモデルに「宮殿」としての格式を表現しようとする姿勢が見られる。こうした京都御所に倣う姿勢が最も顕著に示されたのは、吹上宮殿の計画案であり、そこでは建物の室内や外観に御所風の意匠が多く用いられた。

竣工した御学問所には、他の表宮殿の建物と大きく異なる独特の意匠が用いられ、特に室内意匠については、1階部分には和歌に因んだ意匠、2階部分には御講学の中心であった儒教に因んだと考えられる「四君子」などのモチーフが適用された。御講学の場の室内意匠を講義の内容に因んで決めることは、赤坂仮皇居に新築された洋風御学問所にも見ることができ、さらには近世以前の「御学問所」にも見られる傾向といえる。そのような点において、明治宮殿の御学問所には近世以前からの御学問所の系譜が継承されていると見ることができる。

註

- 1) 『日本建築学会計画系論文集』第572号、pp.159-166、2003年10月
- 2) 『日本建築学会計画系論文集』第578号、pp.169-176、2004年4月
- 3) 『日本建築学会計画系論文集』第582号、pp.161-168、2004年8月
- 4) その他、奥宮殿の建物については「明治宮殿の設計内容に見る『奥宮殿』の構成と聖上常御殿の建築的特徴」(『日本建築学会計画系論文集』第586号、pp.163-170、2004年12月掲載予定)にて詳しく論じた。
- 5) 平井論文では、「機能・平面の両者共に延宝度に於て対面の為の殿舎としての近世的学問所が成立したと見るべきであろう」(p.604)とされている。
- 6) 藤田論文(後者)では、中世末から近世初頭にかけての御学問所で行われた学問・対面が儀礼的でなかった点を重視し、「御学問所が有する私的性格の不変性」(p.223)や「天皇個人に密着した空間という特質はなお不変だった」(p.224)として御学問所の性質を位置づけている。
- 7) 宮内庁編『明治天皇紀』(吉川弘文館、1969年他)全13巻
- 8) 『明治天皇紀』明治7年12月22日条
- 9) 宮内庁所蔵「赤坂仮皇居御座敷向之図」(史料番号・218-142、日付なし)
- 10) 註8に同じ。「室の広さ約三十帖、絨毯を敷き」とある。
- 11) 『工事録』所収「西洋御学問所御顔面掛銅物及下地直シ致方共出来費額概算」(明治15年4月17日)附図
- 12) 註10参照
- 13) 『工事録』所収文書(明治10年11月30日)より。『明治天皇紀』(註8に同じ)には「塗るに緑色のペンキを以てし」とある。
- 14) 明治5年の御講学について、『明治天皇紀』には「時風洋学のはるゝこと盛なるがため、経書の進講は一時廃せられて専ら和漢の歴史・西洋翻訳書の類のみ用ゐらるゝこととなり、弘之は独逸國國法学者ブルンチリーの著を自ら抄譯して國法汎論と題せる書を進講し、又独逸語の御練習に奉仕す」(明治5年1月7日条)とある。
- 15) 日本公園緑地協会編『日光田母沢御用邸記念公園本邸保存改修工事報告書(本文編)』(栃木県土木部建築課、2000年)pp.173-197
- 16) 宮内庁所蔵「赤坂仮皇居切絵図敷物間地六分計」(218-155)。図面内容と『工事録』所収文書との比較から、明治8年5月～12月頃の作成と判断した。
- 17) 天保期とされる宮内庁所蔵「赤坂御本殿全備総絵図」(A2-55)を用いた。
- 18) 註15の技法調査では、御座所2階の部屋境欄間の長押と鴨居が後補であったことが確認されている(p.384)。
- 19) 『明治天皇紀』明治11年2月13日条
- 20) 『明治天皇紀』明治7年4月30日条
- 21) 『明治天皇紀』明治13年3月17日条
- 22) 『明治天皇紀』によると、「御講学」は明治12年には日曜・祭日、御不例、暑中休暇を除くほぼ毎日の約120日間行われたが、明治14年には合計17回しか行われていない。「御談会」は明治9年に13回、明治12年には7回開かれたが、明治13年には3回以下で、明治14年以降は記録されていない。
- 23) 『明治天皇紀』明治13年1月24日条
- 24) 坂本一登『伊藤博文と明治国家形成 - 「宮中」の制度化と立憲性の導入 -』(吉川弘文館、1991年)には、「(筆者註：明治10年)一月二七日には御陪食が毎週金曜日に行われることになり、さらに翌一年一月一六日には大臣以外に参議も三日毎輪次に参内祇候することになった。これらはすべて天皇と内閣をいっそう密接に結合しようとしたものである。」(p.12)とある。
- 25) 木子文庫所収「御学問所及御座所共地圖・二階繪図」(木094-1-015-1・2、日付なし)。『下調図』明治15年10月4日案(第57号)と一致する。
- 26) 木子文庫所収「御学問所及二階會食所其外共十分一矩計」(木088-2-2、日付なし)。2階に会食所が設けられており、平面図と同時期と考えられる。
- 27) 木子文庫所収「吹上宮殿御学問所立面図(平：木088-3-001、妻：木088-3-002、いずれも日付なし)。柱割りが10月案の平面図と一致する。
- 28) 木子文庫所収「吹上宮殿屋根伏図(木108-3-024、日付なし)」。『下調図』所収屋根伏図(明治15年10月26日：第57号)と内容が一致する。
- 29) 床板が敷居の高さ(2.6寸)だけ下げて張られている。
- 30) 絨毯の高さが敷居の天端と揃っている。同壁画「能楽御覽」(青山御所)は、絨毯の上に敷居が露出しており、畳を撤去して絨毯を敷いたように見える。
- 31) 木子文庫所収「吹上宮殿平面図(日付なし、木092-1-008)」。『下調図』明治15年6月15日案(第48号)と平面が一致し、「呉服之間」(24帖)と記された部屋が付設されている。
- 32) 例えば竣工後の使われ方について、「外國の皇族使節の拝謁等には、式部職から何國の何々と片假名の勲章の名が廻つて来て、御服掛りの侍従が御学問所の二階の物置にある桐の筆笥の曳出しから取り出して、私がお内儀に持つて行った事もあるが(後略)」(園池公致「明治のお小姓 - 続明治宮殿の思い出 -」『心』第11巻6号、昭和33年6月、p.63)との記述が見られる。
- 33) 明治14年11月3日の天長節以降、三大節賜宴は新築の会食所(約100帖)で行われたことが、『明治天皇紀』(明治14年11月3日条)から知られる。
- 34) 『皇居御造営誌・御学問所』の仕様書には、同様の意匠である竣工建物の欄間について「上下縁板鉋形致し」と記されている。
- 35) 京都御所の御学問所の寸法については、宮内庁京都市務所所蔵の現存建物の実測図(1962年作成)記載の寸法を用いた。
- 36) 木子文庫所収「聖上常御殿平面図(木109-1-146、明治15年8月26日)
- 37) 用途ごとに個別の部屋を設けた理由として、部屋ごとに専用の椅子式家具を常設することが想定されたことも考えられる。赤坂仮皇居における家具の使用状況には不明な点が多く、本研究ではこの点について論考を控えた。
- 38) 拙稿「明治宮殿の造営過程に見る木造和風の表向き建物の系譜とその意匠的特徴」(註3)第3章参照
- 39) 木子文庫所収「地繪図」(木123-1-028、日付なし)。『下調図』明治16年10月10日案(第76号)と内容が一致する。
- 40) 木子文庫所収「後席ノ間平面図(木123-2-087、日付なし、明治16年10月頃)は、「休憩之間」と同じ位置に2階建てで計画された。
- 41) 『明治天皇紀』明治22年3月26日条、同年6月25日条など多数。
- 42) 木子文庫所収「御学問所矩計」(木094-1-011、日付なし)。平屋建て。
- 43) 木子文庫所収「内謁見所・御学問所起し絵図(木106-1-001、日付なし)
- 44) 「是ヨリ先キ一月二十二日山里ニ於テ御造営模型天覧ノ際御学問所ヘ二階築造ノ図ト総絵図トヲ調製ス可キノ敕命ヲ奉ス依テ本日宮中ニ於テ皇居御造営図ヲ天覧ニ供ス」(『皇居御造営誌・巻之六』明治17年2月4日条)とある。
- 45) 『皇居御造営誌・巻之七』明治18年10月7日条
- 46) 木子文庫所収「御学問所他屋根伏図(木100-2-041、明治17年2月14日)
- 47) 『皇居造営録・御学問所』所収「御学問所平面図(明治17年5月7日)
- 48) 木子文庫所収「御学問所地之間図・御二階」(木094-1-033-1・2、明治18年1月28日)
- 49) 日露戦争宣戦布告に関する御前会議(明治37年2月4日)では、2室が一体的に使用されたことが、聖徳記念絵画館壁面「対露宣戦布告御前会議」および宮内庁所蔵「宮中御前會議布設皇族會議秘密院議場布設略図」所収「表御座所ニ於テ御前會議之節御布設略図」(明治37年2月4日)から知られる。
- 50) 木子文庫所収「御学問所二階建給分壹矩計」(木094-2-010、日付なし)。2階部分に「二拾帖之間天井高サ」との書き込みが見られる。
- 51) 木子文庫所収「御学問所二階建矩計」(木107-1-023、明治18年9月13日)
- 52) 2階「御学問所」は、竣工後に「御二階之間」へと改称された。また園池公致「明治宮殿の思い出」(『世界』129号、昭和31年9月)には「階下とほとんど同じ間取りだが、これは全く使用せられなかった」(p.181)とあり、竣工建物の2階は明治期にはほとんど使用されなかったと考えられる。
- 53) 『皇居御造営誌・巻之七』明治18年10月7日条
- 54) 木子文庫所収「御学問所地之間図」(木094-1-035-1・2、明治18年4月25日、明治18年6月7日更正)
- 55) 例えば「仕法書」(先掲)には、「二階惣試板張床力間断ニ致シ其外敷居鴨居差鴨居長押廻り共仕様前同断」「御学問所御床コ階下同断ニ致シ」とある。
- 56) 『皇居造営録・御学問所』所収「御学問所及呉服之間共建具構造製作仕様書」(明治20年5月)から、建具意匠の決定が明治20年5月であることがわかる。
- 57) 木子文庫所収「建具詳細図(木092-4-010、明治19年2月28日)
- 58) 木子文庫所収「御学問所及廣間北之間絹張障子拾分一之図」(木093-2-082-03、日付なし)。他に中国風の計画面案としては、木子文庫所収「御学問所二階外側外面舞良戸硝子障子拾分一之図」(木093-2-082-01、日付なし)がある。
- 59) 中村圭介『文明開化と明治の住まいとインテリアの近代化(上)』(理工学社、2000年)に、「明治後期には中産階級にも広がり、代用材のサクラやケヤキを着色し、唐木にみせる手法が発達した」(p.141)とある。
- 60) 『皇居造営録・御学問所』所収「御学問所修造建具水木賊番キ着色共受負申込之義伺」(明治21年6月1日)には、「着色用木炭」と記されている。
- 61) 『皇居造営録・御学問所』所収「御学問所階上廣間欄間仕格ノ費仕増受負申付伺」(明治20年6月18日)附図
- 62) 『皇居造営録・御学問所』所収「階上御学問所及廣間北之間椽座敷共格天井及猿頬天井共模様替仕様書」(明治20年2月)
- 63) 註62附図「御学問所格天井縁刳木正寸之図」(明治20年2月)、「格縁刳付方之図」を見ると、刳付けは「千切」を使って行うよう指示されている。
- 64) 『皇居造営録・御学問所』所収「御学問所階上同一之間廣間共格天井縁色付仕様書」(明治20年7月)には、黒柿について「右仕様油煙二晒蠟ヲ加へ解キ致し刷毛引色付之事」と記されており、桑については「右仕様ヤシヤローハクロド石灰■調合致シ右共■シ汁石灰ヲ加へ」(■は不明)とある。
- 65) 農商務省山林局編『木材ノ工芸的活用』(大日本山林会より明治45年発行・昭和57年財団法人林業科学技術振興所より復刻)を見ると、「各論第三：建築用材」(p.187)では床柱の材料としてのみ紹介されているのに対し、「各論第四：指物用材」では、桑の色付けを石灰水で行うこと、黒柿が狂い安く精巧な仕事が必要であることなどが記されている(pp.271-272)。
- 66) 『皇居御造営内部諸裝飾細細図』に「須磨の寢覺」と記されている。
- 67) 例えば、源兼昌「淡路島かよふ千鳥の鳴く声に幾夜寢覺めぬ須磨の関守」などが考えられる。
- 68) 『広辞苑』(第二版補訂版、岩波書店、1978年)には、「鳥の巢の卵を包含する形状を表現した漢民族使用の模様」(p.343)とある。
- 69) 『明治天皇紀』によると、元永永字による論語の進講は明治5年以降廃止されていたが、明治11年1月に再開され、天皇も「漸次経学を好ませらるゝに至る」(明治11年1月7日条)ようになったと記されている。
- 70) 『皇居造営録・絵画』所収。明治18年9月付けの史料と内容が一致する。
- 71) 明治18年6月11日以前の画題を写した「皇居御座敷総様」(『皇居造営録・絵画』所収)には、画題を1・2階で区別する姿勢があまり見られない。
- 72) 斎藤英俊「山里と草庵」(日本美術全集14「城と茶室」、講談社、1992年)では近世の学問所の意匠について、「草庵的意匠の学問に結びついて近世まで引き継がれている」(p.177)と、学問の内容と建物の意匠に関係が見られることを指摘しており、同論文が参照した山崎浩章「近世上層住宅における学問所の形態と用法について」(東京工業大学建築学科提出修士論文、1986年3月)では、上層公家住宅の学問所に適用された草庵風意匠が、東山院御所以外の御所には適用されなかったとある。明治宮殿において、御講学内容と意匠との関係は2階御学問所の裝飾モチーフに見ることができ、御所にくだけた意匠を用いないという点は、1階の御座所に格式重視の書院造風意匠を適用し、内向きの2階に比較的自由な意匠を用いた点に窺える。

(2004年10月8日原稿受理、2004年12月17日採用決定)